



禅の美意識が凝縮されたかのような眺め。ふすま絵は明治期の作といわれる



京街道を見守るように安置された子安地藏。峰山の名石工、二代目長谷川松助の作

また、一般の人に広く知られている修行には「坐禅会」があるが、この寺には常時十名近い修行僧がいまも安居しているのである。格式ある専門道場としての伝統を受け継ぎ、厳しい修行や早朝の坐禅、作務に励む雲水僧の姿には心が洗われる。現在の僧堂は三十七世・原田祖岳老師が建立したもののだが、この立派なお堂で坐禅を体験してみるのも、仏の心に触れるよい経験になるのではないだろうか。

(四十一世・高橋信善住職に伺う)

宮津の歴史と景観



「天橋立ビューランド」から眺める“飛龍観”



天橋立の運河に架かる「廻旋橋」。橋桁が低いため船が通る際、橋が廻旋して開く

日本三景の景勝地 天橋立

日本三景の一つ天橋立は、全長三・六キロメートル、幅二十〜百七十メートルの砂礫の堆積地形である。そこに八千本もの松の木が生い茂っている。今から約四千年前、丹後半島の東側の河川から流れ出た砂が海流に流され、それが阿蘇海の海流とぶつかって、長い砂礫の帯をつくり出したのだ。その形が「天への架け橋」のように見えることから、この名が付けられた。

一方、古い書物によるとイザナギノミコト(男神)がイザナミノミコト(女神)の住む地に天上から通うため、天と地の間に長いはしごを架けて行き来していたが、ある日イザナギノミコトが寝ている間にはしごが倒れ、天橋立になったという神話も残されている。絶景ポイント、「天橋立ビューランド」からの眺めは龍が天に昇るように見えることから「飛龍観」とも呼ばれている。

近世城下町の風情を残す 門前街

安土桃山時代の細川藤孝(幽斎)の宮津城築城に伴い、大手川を挟んだ対岸に城下が築かれた。その後、京極高広によって近世城下町の整備が整い、その姿は今もおおむね変わっていない。街を歩くと、格子戸や袖壁が残る町屋の家屋が点在し、なかでも城下屈指の豪商といわれた旧三上家住宅や、三百年以上の伝統を守り続ける袋屋醤油店などの建物が江戸城下の風情を偲はせる。

袋屋醤油店。300年以上の伝統を今なお守り、営業を続けている



旧三上家住宅。城下屈指の豪商元結屋三上家の屋敷跡で国の重要文化財



旧街道と金引の滝

旧宮津街道を散策すると雄大な滝が現れる。高低差四十メートル、幅二十メートルに及ぶ「金引の滝」で、下流の白滝と臥龍までを含めてこう呼ばれている。また、左右に流れ落ちる水の右側が「男滝」、左側が「女滝」とも呼ばれ、豊かな水量は年間を通して涸れることがない。平成二年、天と地をつなぐ自然美の原点として「日本の滝百選」に選ばれた。



金引の滝。雄大に流れ落ちる水は四季を通じて涸れることがない

